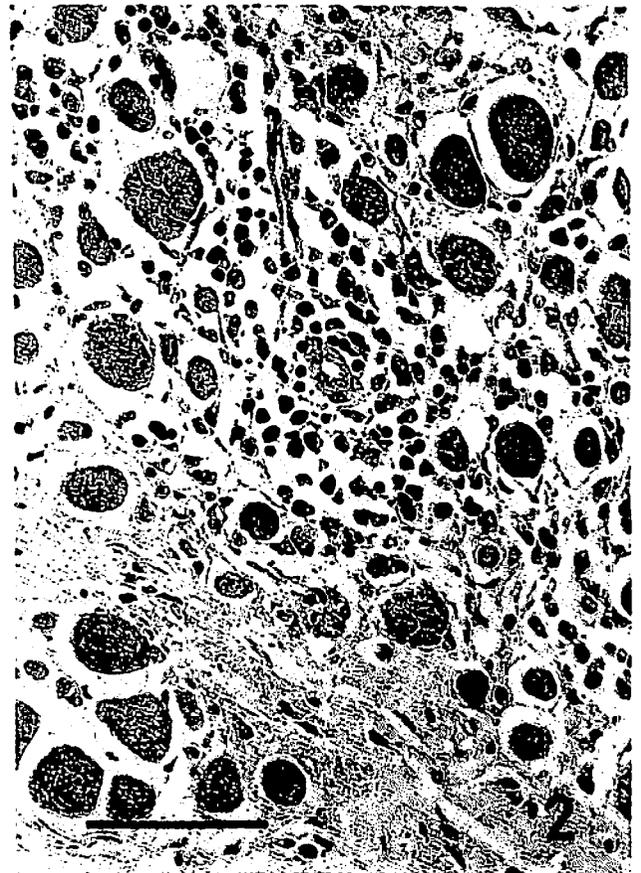


# イヌの萎縮性筋炎

東京大学農学部家畜病理学教室出題 第16回獣医病理学研修会標本 No.235



動物：雑種犬，♂，2～3才

臨床所見：1974年10月に開業医のもとへ来院，開口が困難で側頭筋および咬筋の著明な萎縮を呈した。その後特別な治療はおこなわず，約1年間観察をつづけたが，症状が好転しないまま，1975年10月末に誤嚥により窒息死した。この間1975年4月にジステンパー肺炎に罹患したが，治癒した。1974年10月～11月の期間に計3回おこなわれた血液検査の結果はほぼ正常範囲で，赤血球数428万～547万/mm<sup>3</sup>，白血球数8,800～15,400/mm<sup>3</sup>，Ht値36であった。白血球百分比では，好中球が左方移動を示し，杆状核58～69%，分葉核4～6%で，好酸球9～10%，好塩基球0～1%，リンパ球11～20%，単球2～5%であった。BUNは14mg/dl，血清GOTおよびGPTは高く，それぞれ125および120 Karmen単位を示した。血清β-グロブリン分画がやや多く，A/G比は0.8～0.9であった。

肉眼所見：ほぼ全身の骨格筋に病変がみとめられたが，側頭筋の変化がもっとも顕著で筋実質はほとんど消失していた。咬筋および背部筋，前・後肢筋は蒼白で萎縮が著しかった。

病理組織学的所見：全身の骨格筋に筋線維の萎縮，変性，壊死がみられ，線維化をともない，プラズマ細胞お

よびリンパ球の浸潤が特徴的であった。側頭筋では筋線維が消失し，結合織と脂肪織で置換されていたが細胞浸潤は乏しかった。咬筋，前肢筋，肋間筋，背部筋などでは細胞浸潤がみられた。変化がもっとも著明であったのは後肢筋で，萎縮した筋線維は空胞化，硝子化，淡明化を呈し，一部は壊死に陥り，プラズマ細胞およびリンパ球の浸潤と線維化が著明であった。写真1は提出標本と部位は異なるが同じ左後肢の筋線維の消失と激しい細胞浸潤を示す。写真2は提出標本で血管周囲性のプラズマ細胞浸潤を示す(Scaleはいずれも50μm)。なお病変部の小動脈，細動脈の壁は空胞状に膨化し，内膜の水腫がみられた。末梢神経線維に著変はみられなかった。

診断：臨床的に側頭筋および咬筋の萎縮が明らかであったことから好酸球筋炎あるいは萎縮性筋炎のいずれかが疑われたが，好酸球増多はなく，組織学的には筋線維の萎縮，消失とともにプラズマ細胞およびリンパ球浸潤が特徴的で，Martin and Thompson (1960)，Whitney (1957)などの記載と一致すると思われ，全身性の萎縮性筋炎 atrophic myositis と診断された。なお，筋病変部から血液寒天培養で菌陰性，イヌ腎培養細胞でCPEを示すウイルスも検出されず，原虫や寄生虫もみられなかった。